

<論文>

運動観察の感性学的研究

クロスカントリースキー観察の習熟度の比較を通して

王 長紅 信州大学大学院教科教育 専攻

渡辺 伸 信州大学教育学部 スポーツ科学教育講座

The Aesthetic Study of the Movement Observation
(Distinguishing the skill degree of the cross-country skiing)

CHANG HONG WANG Physical Education, Graduate School of Faculty of
Education, Shinshu University

NOBORU WATANABE Sports Science Education Course, Faculty of
Education, Shinshu University

The academic research of aesthetic study in movement observation is to judge the movement appearing on the surface through our eyes and also to judge the value of movement, synthesising the experience with its movement, understanding the inner structure of the movement which appears, by emphatic understanding of the other players' movement. This research is to reconfirm and find the fact that excellent leaders and veteran players have insightful eyes to see through an inner structure of the movement, by observing various phenomena of the cross-country skiing in the sports field. In short, this research is the one which sees through the movement with aesthetic eyes in the observation of movement. The ability to distinguish the movement with morphological aesthetics is a basic essential ability for any sports leaders, and it plays an important role for sports instruction.

【キーワード】 運動の感性学的判断、自己運動、運動感覚経験

1、はじめに

自らも動き、他人に影響を与え、他人の動きを見ることによって多くを理解しながら生活している人間にとって、人間の動きは「中立的」なものとして現れるのではなく、何かを意味するもの、感性的な価値判断を求めるもの、あるいは自らの動きを誘発するものとして現れる。

ワイツゼッカーV. v. は、生命あるものの運動を「自己運動」と名づけ「内在的な主体の力により自分で動く客体の運動。その運動はただ他の主体との関係においてのみ現実的である」と説明している（[1], 306 頁）。

ここでは、他人の動きを観察する主体は、もう一つの主体の動きを「対象的に」向こう側に見る傍観者ではない。他の主体の動きを「こうむる」のである。すなわち、他人の動きを見る私は何らかの意味で「動かされて」しまう。ここに、客観的世界の出来事を科学的に研究する立場とはまったく異なる動きの「感性学」の立場がある。（[2], 36 頁）

特に人間の運動の「感性学」は、共感による観察が不可欠である。マイネル（Meinel.K.）の意味での運動共感は、フッサールのキネステーゼ（Kinästhesie）によって成立していることは疑いない。それは我々が人間以外の生き物の動きでさえも死せる物体の動きから直観的に区別するという日常的経験から明らかである。

キネステーゼとは、見る者の運動を誘発するような感覚である。しかし、日常生活では、その日常性の中に埋没し、このキネステーゼに気づくことは困難である。キネステーゼは、ギリシャ語のキネーシス「運動」とアイステーシス「感覚」とから合成された語で、それを直訳してドイツ語で *Bewegungsempfindung* と表示されることもある。キネステーゼ的能力は、身体そのもののもつ構成機能のことである。

これは通常その言葉から想像されるような「運動の感覚」を意味するのではなくて、むしろ運動感覚との不可分な結合、ないしは運動としての知覚を意味するものとして定義されている。（[3], 89～90 頁）

スポーツ実践における人間学的運動学の中核的問題は、運動を教える・覚える関係の中にある。人間の生理学や力学上の科学的知識が運動の習得にとって決定的なのではない。また、それらの因果性を知悉しているからといって筋肉の運動の操作的支配を行うことができるわけでもない。だがそこでは、全く「知」の領域を参画させないというわけではない。ここに作用する知は、村木陽一郎のいう「身体知」（[2], 125 頁）また、ボイテンダイクのいう「感覚運動知能」（[2], 25 頁）に当たるものなのである。

人間の運動を観察するときには、そこに観察する者と運動する者の「共通のチャンネル」（[4], i 頁）が成立しなければ動きの共通の判断ができない。本当に実践的意義を持つ動きの観察は、「観察対象の運動経過の中に、あたかも自分が同様の運動感覚的実践的意義をもって入り込む」（[5], 123 頁）のである。

感性学的に動きを観察するということは、運動する者との「感覚上のコミュニケーション」（[6], 157 頁）をとることである。この「感覚上のコミュニケーション」において、金子はさらに、「運動を見るときにも、パラージのいう潜勢運動をその対象に放射しながらその中に運動共感的観察を行うことが前景に引き出される。」（[5], 123 頁）として、運動を見ることにおけるキネステーゼ的能力を強調している。

マイネルは、「運動共感のなかでは、以前の自分の運動経験の全財産が再び動き出す。

その全財産は、運動をかつて視覚だけでとらえ、あるいは、“客観的”に記録していた時に可能であったよりも、運動というものを観察者にはるかに深く把握させるようになる」([7], 124 頁)と述べている。このことから運動共感が観察にとってどんなに重要かがわかるであろう。

また、金子は運動の共感的な観察において次のように述べている。「運動共感は、運動像を対象 (Gegenstand) として、向こう側に見て共感するのではない。運動想像力によって、自らその運動を実施するところに、初めて全的な意味での運動共感が成立する。つまり、観察対象になっている運動経過を改めて観察者自身の自己運動として、潜勢的 (virtuell) にやってみてそれを観察するのだから…。」([5], 123 頁)

このように運動観察における感性学的研究は、我々の眼を通して現れてくる動きを判断していくだけではなく、観察者自身もその動きを共体験し、動きの内的構造を理解し、その動きに現れている美を感受して、動きの価値判断をすることなのである。ここでは、訓練された「耳」を持つ音楽家が演奏の芸術性を判断するのと同様に、訓練されたキネステーズ経験を持つ観察者の「眼」によって、動きの全体的な質を把握しようとするのが運動観察による感性学的研究の狙いである。音を聞き分けられない音楽教師が何も教えることができないように、動きを見分けられないスポーツの指導者はやはり何も指導することができないのだから。

この種の研究は、上述のことからもわかるように、因果関係を発見し、それによって説明する科学ではなく、ある意味で訓練されたまなざしが直観的に発見する動きの構造やその変形、さらに出来映えを記述する科学である。このような科学の由来はゲーテ (J. w. v. Goethe) のモルフォロジー (Morphologie) にまでさかのぼる。([4], ii 頁)

2、研究の目的

本研究は、スポーツ領域におけるクロスカントリースキーのさまざまな現象を観察することによって、すぐれた指導者や経験者が見抜く能力を持っているという事実を発見し、再確認することである。要約すれば、本研究は運動観察において、感性的に動きを「見抜くこと」の研究なのである。

「見抜くこと」において、その差がどのように現れているのかを調べ、この観察能力とは何か、さらにどのようにしたらそれを身に着けられるのかを研究するための基礎の一端を究明する。

3、考察の方法

今回の考察方法は、「クロスカントリースキー観察の習熟度を見分ける」ために、二歩スケートイングの世界のトップレベルの男子の滑りと経験者である著者、体育科女子大生および初心者である女子大生4人の滑りの連続写真を作り、著者と体育科女子大生およびスキーの初心者である美術科女子大生4人がこれらの滑りを絵にした。でき上がった写真

や絵については、国際的なコーチ（佐々木）と経験者、および複数の非経験者がそれぞれの滑りについてコメントをした。これを今回の研究の基礎資料として、滑る運動をその絵を通して動きをどのように捉え、その感性学的認識の判断が実際にどのように行われるか、経験者と非経験者の感性学的認識の差がどのように現れているかを併せて考察した。それによって、指導者に必須の「動きの感性学的判断」の重要性を明らかにすることが狙いである。観察眼の具体的なものとしては、佐々木コーチの眼、経験者の眼、非経験者の眼の観察能力について考察した。

4、研究の意義

写真を絵にするような研究はいったいどういう意味を持つか。それは、描かれた絵からいろいろな人の動きの感性学的判断の差を診ることができるからである。もう一つの目的は、動きを絵で表現することができることもこの感性学的判断を支えている同じ能力、すなわちキネステーズ経験であると考えからである。

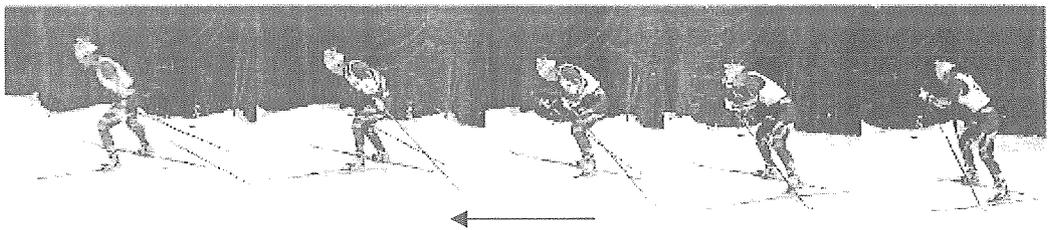
5、事例による確認

①佐々木コーチの眼。

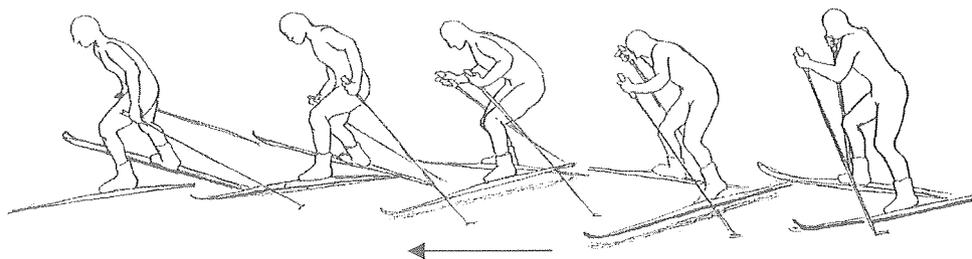
本研究で述べているコーチは、クロスカンリースキー日本代表選手であった。そのコーチに、滑りの研究方法の一つ、経験者である著者と非経験者である美術科女子大生が描いた上級者と経験者ならびに初心者の絵と写真を見てもらい、それぞれの滑りにどのような印象を持ったのかを述べてもらった。

コーチは、写真や絵についての背景を説明しなくても、滑りについてのコメントでは驚くほど滑りの詳細まで見抜けるのである。例えば、静止している画像でも自分のキネステーズを通して滑走者の滑りの動きを見ることができるのである。

写真 1 経験者である女子大生の滑りである。



絵 1-C 写真 1 を使って経験者である体育科女子大生が描いた自分の滑りの絵。



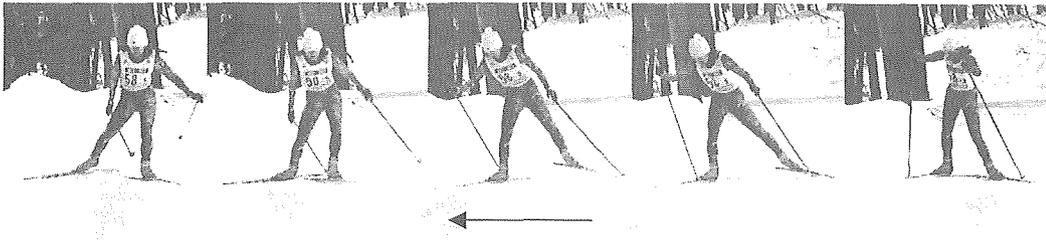
絵 1-C についての佐々木コーチのコメント。

1、急坂の所で一生懸命登っている滑りである。坂を登っているから頭は下を向きすぎている。

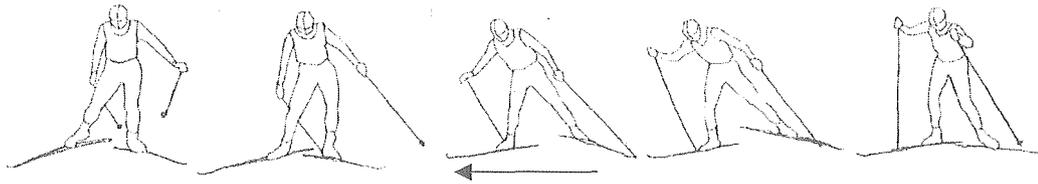
2、コースの中の難所を滑っている。身体に力を入れてしまって、恐らく今の滑りは、一生懸命踏んでいるところであろう。

まとめ：佐々木コーチは絵を見ただけで、滑走者の背景についての情報をなんら知らなくても、また水平に描かれた絵でも、坂を登っていることを見抜ける。一生懸命踏んでいることもわかるのである。

写真 2 初心者である女子大生の滑りである。



絵 2-A 写真 2 使って非経験者である美術科女子大生が描いた初心者の滑りの絵。



絵 2-A についての佐々木コーチのコメント。

A 全体的に見ると動き自体にスピードがない。

B 上体の動きが左右に激しく動いている。一つの流れとして見ると上手な滑りではない。

C ストックが雪面をキャッチする時、膝が内側に入りすぎている。

D 視線は前方を見つめていない。

考察：このように鋭い観察眼を持っている佐々木コーチは、実際の滑りを見なくてもいろいろなことが言える。絵と写真を見ただけで滑りはその良し悪しの判断を細部まで見抜く観察力を持っていることがわかる。佐々木コーチはそのキネステーズ経験を通して静止している「絵」と写真の中に滑りの動きの現実と出来映えまでも判断する。

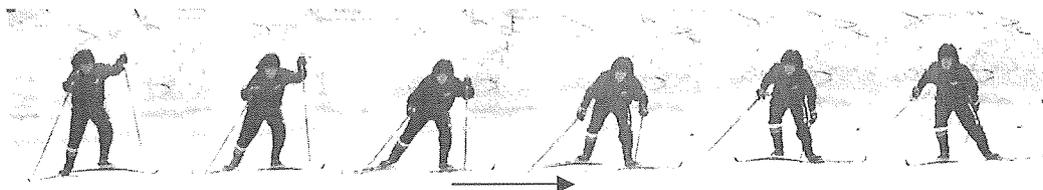
佐々木コーチのコメントを考えると、描かれた絵からどの程度の滑りの経験を持っているかも判断できる。佐々木コーチは長年の間クロスカンリースキーの世界で獲得したこのキネステーズ経験を利用して滑りを鋭く観察し、滑りの中に潜入し、この滑りに共振していることがわかる。

② 経験者の目

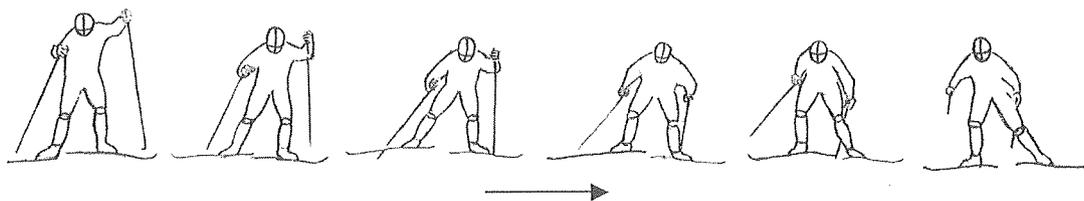
経験者である女子大生と著者はスキーについて10年以上の経験を持っている。長い間スキーと関わっていて滑りを十分に経験している。滑りを見るときに非経験者の眼より多くを見極めることができる。それは、滑りの「中身」を知っているからなのである。すなわち、滑る感覚を通して「動き」を見ているのである。

また、経験者は非経験者のように部分的に滑りを見るのではなくて、滑りの全体を見ているのであり、そして、全体こそ「滑り」の動きの真の意味を明らかにしてくれるものなのである。そこで初めて滑りの良し悪しの判断ができるのである。しかしこの経験者は指導経験を持っていないためか、他者の滑りの観察者として、佐々木コーチのような見抜きの眼はまだ訓練されていない。

写真3 経験者である著者の滑りである。



絵 3-B-1 写真3 使って経験者である著者が描いた自分の滑りの絵



絵 3-B についての著者のコメント

絵 3-B は、著者の滑りである。自分はどこで滑っているのか、当時の天気や気温、雪の温度などを含めて雪質、スキー道具の具合、滑ったときの気持ちなどすべてを思い出せる。そして、それを描こうとする。だが、例えば、上体の進み具合、顔の向いている方向、膝の角度、足の力の入れ方、足指の動きなどの部分が描きたくてもなかなか上手に描けないのである。正直に言って、研究者自身が納得できるような絵が描けなかった。それは自分の滑りはよくわかっているのだが、それを細かく描こうとするとどうしてもそれを上手に描けないのである。つまり経験者は「動き」を見分けることができるがその「動き」を思った通りに描けないのである。それは、筆者自身の

絵の表現技術の未熟さによるものである。

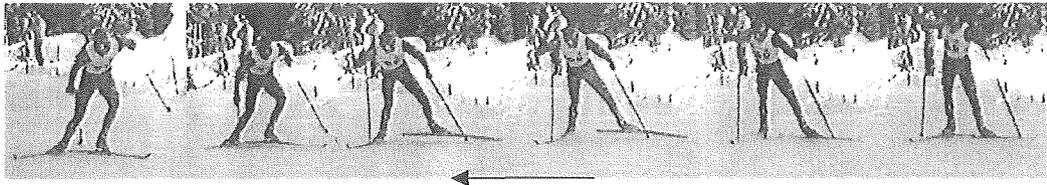
写真左から4番目、絵3-B左から4番目の滑りは、力をギュッと入れて体重はほぼ本人の左脚に乗っている。左側のストックは力を入れて押しながら、キックアップの後脚を支え脚へ引き付け始めている所が絵に上手に表れていない。重心が真中であって馬に乗るような感じ。滑りの移り変わりの最も大切な動きが全く表現されていないのである。

まとめ: 経験者としての筆者は、「動き」を見るときに、いつも自分の身体を通して、つまり自分の経験に照らしてその動きの感じを把握したり、運動を理解するのである。

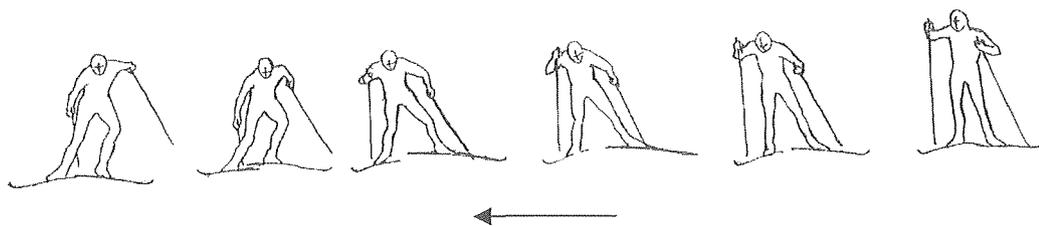
しかし動きはよくわかるのだが、描くことが訓練されていないため上手に絵で表現することは難しい。

また、筆者は「動き」が見抜けるので、「動き」が見抜けない非経験者が描いた絵を見ると満足できない。そこから、描くことと見抜くことは、一つの同じ根をもつ現象であると考える契機が生じる。非経験者の絵には、「動き」が表現されていないことがわかるからである。

写真4 世界のトップレベルの男子の滑りである。



絵4-C 写真4を使って経験者である体育科女子大生が描いた上級者の滑りの絵。



絵4-Cについての経験者である体育科女子大生のコメント

絵4-Cは、上級者の滑りだということがすぐわかる。苦しさを感じさせず「楽しそう」に滑っている。これを見ると、自分にも簡単にできそうな気がする。また、登りを感じないでスピード感を感じさせる。気持ちがいい滑り。パワーがあるだけでなく、柔らかさの中にパワーを感じる。

絵を描くときに滑りの流れが伝わるように心がけた。しかし、ストックの握り方や、正確な顔の向きまでは、把握することが出来なかった。

特に、右から 2.3.4 番目の時の写真で右手の肘から先をどのくらい開いているかなどがわからず、うまく描けなかった。右から一番目の写真の絵は、腕の使い方が実際よりも小さく、肩に力が入ってしまっているような感じになってしまった。また、滑りの動きが感じられず、立っているような絵になってしまった。

上級者の写真は、日頃、参考にしたり、自分の中でこのようなよいイメージを持って練習などに望んではいらる。体力、技術、経験などが足りないせいか、イメージ通りの滑りができないため、上級者の滑りを正確に描くということができなかった。

まとめ:経験者と非経験者との描き方の観点が異なる。それは描写技法の能力ではなく、運動を見抜くことと同一の能力なのである。つまり、運動を見抜く眼を持っているかどうか、すなわち同じ運動のキネステーズ経験を持っているかどうかの問題なのである。

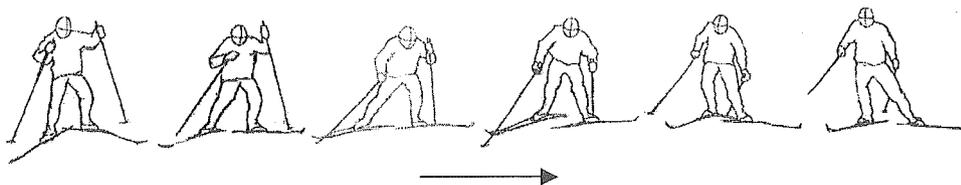
滑りの運動の経験を持っている人はそれと知らずに滑りのキネステーズを絵に描こうとする。そして、写真の中から滑りの動きを読みとってそれを絵に表現しようとするので、経験者の眼から見れば非経験者の絵とは本質的に異なる印象を直観できる。

③ 非経験者の眼

a、何を見たらよいかという判断ができない。

非経験者である美術科の女子大生は、滑りの写実面の描写は問題ないが、実際の滑りの「動き」を描き出すことはできないのである。このことは、非経験者が、「動き」を見る訓練を受けていないため運動共感が起こらないので、運動の専門家に納得のいくような絵が描けないということを示している。

絵 3-A-1 写真 3 を使って非経験者である美術科女子大生が描いた筆者の滑りの絵。



絵 3-A-1 についての滑りの非経験者である美術科女子大生が描いた時のコメント

絵 3-A-1 は一番最初に滑りを描いた絵で、「描いたとき自分にとっては、『動き』をほとんど絵から捉えることができず、細かく描くことができなかった。足の浮いているところを見つけることが難しかった。また、ストックの方向と手首の動きを捉えることができず、つかめなかった」と述べている。

絵 3-A-1 についての滑りの経験の全くない女子大生が絵を見るときコメント

スキー経験の全くない女子大生が滑りの絵を見て「さっぱりわからないので、何を、どういう風に見てよいかわからない」と述べている。

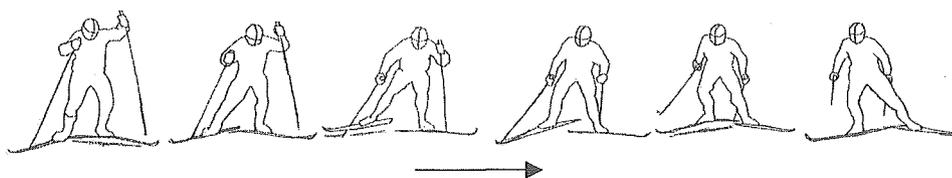
このようなスキーの経験の全くない女子大生は、滑りの単純な上手・下手が判断で

きない。その上、滑りの方向さえも逆に見てしまうのである。

非経験者は滑りを見る訓練を受けていないので、専門家が納得する絵が描けないのである。

b、非経験者でも何度もその動きを写真やビデオで見たり、経験者の説明を受けて、詳しい情報が与えられると、何度か描いているうちに次第に経験者がいくらか満足できるような絵が描けるようになることがわかった。

絵 3-A-2 写真 3 を使って非経験者である美術科女子大生が描いた筆者の滑りの絵。



絵 3-A-2 についての滑りの非経験者である美術科女子大生が描いた時のコメント

絵 3-A-2 はいろいろな滑りの絵を描いた後で、一番最後に描いた絵である。絵 3-A-2 と比べて絵 3-A-1 はどこに力を入れて滑っているのかがわかりにくい。

「絵 3-A-1 下手な漫画のよう。動き（かたち）がめちゃくちゃで滑り自体が全く違って見えてしまう。

絵 3-A-1 より絵 3-A-2 は上手に描けると思っていた。絵 3-A-2 は今までに描いた数枚の絵のように重心や流れをしつように意識することはあまりなかったが、流れとコツをつかんだのだろうか、それ程苦労せずに描けた。しかし左側から 1 番目の絵は苦労した。」

滑りの経験者にも満足してもらえるような絵を描くためには、写真から見て取れる「動き」を、経験者から詳しく説明を受けたり、ポイントの情報を与えられ、何度も描いているうちに、次第に「動き」の勢いが表現された生き生きとした絵が描けるようになる。運動経験のない人でも、このようにある程度写真から「動き」読み取りそれを描くことができるようになってくるのである。

考察：運動をやったことのない人でも写真の人物の滑りの動きに自分の身体によって共感しようと試み、繰り返し自分のキネステーズの可能性を触発しながら描くように努力することによって、描くことができるようになる。

経験者が、「動き」を見るときに、いつも自分のキネステーズを通して、つまり自分の方から見るものを作り出して、動きの感じを把握し、運動を理解していることの一端が示された。

6、まとめと展望

人間の動きの良し悪しを見抜くことは、訓練された人間のまなざしによってしかできない。この観察力は、長年に渡って運動の世界で積み重ねられたキネステーズ経験の体系に由来するである。スポーツの指導者や選手は動きの判断をする時にいつも自分の持っているキネステーズを通して動きを見ているのであり、しかもこれを無意識的に利用しているのである。この観察力は指導者にとって基本的で不可欠な能力であり、運動指導にも大きな役割を果たすものである。

動きの感性学は実際の目の能力、すなわち動きを感じる能力、感じ分ける能力を表現したものである。人間はだれでもこの可能性を持っている。特にスポーツの指導者や研究者は、動きを目で見る能力を価値あるものとして自分自身の中に位置づけることが必要である。運動の現実の構造や出来映えをしっかりと捉えようとするれば、瞬間的に動きを見抜くことが要求されるのである。

運動の指導者は運動の実践や運動観察の中から浮かび上がってくる諸問題を捉えることによって、スポーツの指導実践と研究に実践的で価値の高い貢献ができるのである。モルフォロジー的感性学的に見分ける能力は、運動を教える教わる関係にある人たちにとって不可欠であると言える。

引用文献

1. V. v. ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』新装版(木村敏・濱中淑彦 共訳、)みすず書房 1995
2. K. マイネル遺稿『動きの感性学』(金子明友編訳)大修館書店 1998.
3. 木田 元・野家啓一・村田純一・鷺田清一『現象学事典』弘文堂 1994年
4. 金子明友監修 吉田 茂・三木四郎編『教師のための運動学』大修館書店 1996.
5. 金子明友「運動観察のモルフォロジー」筑波大学体育科学系紀要 1987.
6. 金子明友・朝岡正雄編著『運動学講義』大修館書店 1993.
7. K. マイネル『スポーツ運動学』(金子明友訳)大修館書店 1981.

(2000年3月31日 受付)

(2000年7月21日 受理)